

諸橋轍次著「論語の講義」大修館書店 1973年9月10日刊を読む

『掌中論語の講義』の序

1. 古典を味はって静かに世を觀じ、己れを省みることは、有益なることでもあり、また楽しいことでもある。論語は、人の知る如く、孔子の言行を主として集録したものであるが、中に納める内容の、汎く人生各般の事柄に及んでをる点、その説くところの、適切であって而も中正を失はぬ点、並びに用ひてをる語句の、簡潔で而も平明である点など、色々の特長を備へてをるので、世界の古典中、特殊な存在と見なされてをる。先賢がこれを称して宇宙第一の書といったことは、決して溢美の言葉ではないのである。
2. この書は、公式には応神天皇の 16 年(西紀 285)に百濟の博士王任によって、初めて我が国に将来されたと云はれる。して見ると、その伝来は、元明天皇の和銅 5 年(712)に編纂された古事記に先立つこと 427 年、元正天皇の養老 4 年(720)に編纂された日本書紀に先立つこと 435 年、孝謙天皇の天平勝宝 5 年(753)に編纂された万葉集に先立つこと 468 年であって、我が国民の有した最古の古典である。爾来今日まで千有余年、家毎に藏せられ、人毎に誦せられて、国民精神の涵養に裨補し來ったのである。然るに近時、世態の急変に伴ひ、世を挙げて新奇に馳せるの結果、この書もまた高閣に束ねられて、人の記憶から遠ざからうとしてをる。これは、洵に遺憾の極みである。よって不敏を顧みず、敢てこの著を公にすることとした。論語の解釈は、新注古注数百種に及んで、それぞれ長短得失があるが、今はその何れにも固執せず、文義の上から妥当と考へられ、経験の上から適切と思はれる先賢の説に従ってこの書をなした。要は平明・簡易を旨とし、凡そ新制中学卒業程度の力ある人々には、すべて解し得られるやうに心がけた。もし江湖の人々が、これを手ほどきとして古典の中に涵泳せられ、これを通じて世を觀じ、己れを省みる資とせられるならば、ひとり著者の本懐のみに止まらぬと思ふ。

[コメント]

中世日本の論語研究の中心地「足利学校」のある街、足利に育った者の一人として、一生に一度は論語を真正面から学習したいと思っていた。諸橋先生のよいテキストを手にしてうれしく思う。

- 2011年5月11日林 明夫記 -